

『佐柳文男先生（北星学園大学元チャプレン）から学んだこと』

北星学園大学 文学部心理・応用コミュニケーション学科 准教授

片岡 徹 (Email: [kataoka@hokusei.ac.jp](mailto:kataoka@hokusei.ac.jp))

本日の聖書：新共同訳 マタイによる福音書 19章13節～15節（子供を祝福する）

13 そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。14 しかし、イエスは言われた。「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである。」15 そして、子供たちに手を置いてから、そこを立ち去られた。

## 1. 自己紹介

◇1997年3月 文学部英文学科卒業（1995年度：米国マンチェスター大学へ留学）

◇2008年4月より文学部心理・応用コミュニケーション学科へ

（経歴：中高教員、札幌姉妹都市協会非常勤職員（\*札幌国際プラザ内）、国連軍縮札幌会議実行委員会事務局臨時職員（\*札幌国際プラザ内）など）

◇専門：教育学、平和研究

◇主な担当科目：現代教育論（心コミ）、国際教育論（心コミ）、平和学（共通科目）

## 2. 佐柳文男先生との出会い

◇キリスト教学 I:新約聖書（佐柳文男先生）、キリスト教学 II:旧約聖書（山我哲雄先生）

◇二人のクリスチャンの同級生（プロテスタント、カトリック）

◇クエーカー（Quaker: Friends など）について教えて頂く…〈平和への実践〉

◇10年前の出来事（この2年後に北星学園大学で再会）

「…お葉書にある「片岡徹氏」というのは、私が北星在職中に卒業した人物だと思います。懐かしい名前を見て、感慨深いものがありました。あの片岡君が活躍していることを知って、本当にうれしく思います。よろしくお伝えください。」（酒井玲子先生（元理事長・学園長・教授）より）

## 3. 北星学園大学と平和学

◇海外協定校：米国マンチェスター大学（インディアナ州ノースマンチェスター）

⇒世界で初めて1948年に学部レベルで平和学専攻（peace studies）を設置

◇クエーカー：ケネス・ボールディング（Kenneth Boulding 経済学／平和研究）、エリーズ・ボールディング（Elise Boulding 社会学／平和研究）\*孫のビヨーン・ボールディング（Bjorn Boulding）は海外協定校である米国ルイス&クラーク大学からの留学生

◇ (歴史的) 平和教会 (historic peace churches)

① **ブレザレン教会** (ブレズレン教会 Church of the Brethren)

**現在の海外協定校** 米国マンチェスター大学、米国ジュニアータ大学

② **メノナイト** (Mennonite)

**かつての海外協定校** 米国ゴーシェン大学 (Goshen College、**インディアナ州**)

米国イースタンメノナイト大学 (Eastern Mennonite University)

③ **クエーカー** (参考) 新渡戸稲造、米国アールラム大学 (Earlham College、**インディアナ州**)

#### 4. 英国ブラッドフォード大学／大学院における平和学プログラム

◇ 世界で最大規模となる平和・紛争・開発に関する教育研究の拠点

◇ 1973年 平和学研究科修士課程からスタート (クエーカー財団による寄附金)

◇ 初代研究科長 Adam Curle (クエーカー、米国ハーバード大学より招聘)

◇ 現在：社会科学部平和学・国際開発学科

(Department of peace studies and international development)

◇ 主たる領域：紛争解決に関する研究と実践

#### 5. 教員として、卒業生として

◇ 佐柳文男「評論：戦後七十年、日本人の課題」(文芸かわづ 第15号 静岡県河津町教育委員会 2016年)

「これからの日本人の課題は積極的平和を実現するための努力を続けることである。それは国と社会の各方面に巣食う構造的暴力を除去し、日本国内に居住するすべての人が基本的人権と平和的生存権とを享受できる社会国家を建設することである。同時にそれは世界で不当な差別を受ける人が皆無になることを目指すことでもある。」(p. 25)

◇ 隅谷三喜男 (1981) 『大学でなにを学ぶか』岩波ジュニア新書)

\* 佐柳先生が担当されていたキリスト教学 I のテキストの一冊

「大学にいる間、きみたちが専門と定めたことを学ぶとともに、人間とは何であるか、人生とは何であるか、という問いについても考えてもらいたいと思う。未来はきみたちの肩になわれているのだから。」